

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720228

研究課題名(和文)キリシタン手稿類におけるローマ字表記の日本語学的研究

研究課題名(英文)A Study on Japanese Romanization in Kirishitan Manuscripts

研究代表者

川口 敦子(KAWAGUCHI, Atsuko)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：40380810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：キリシタン手稿類に見られるローマ字書き日本語は、同一内容の写本でも、筆者の言語環境によって表記がかなり異なる。キリシタン版が始まった1590年以降は、版本の表記規範の影響を受けながらも、一部に手稿類独自の表記の残存が見られる。それは当時の日本語の音声の問題と関係している。
また、コリヤード『羅西日辞書』諸本の本文異同から、キリシタン版の日本語研究においても活版印刷本ならではの本文成立の背景を念頭に置いて検討する必要があると言える。

研究成果の概要(英文)：The romanization of Japanese in Kirishitan manuscripts, even among manuscripts which have the same text, varies depending on the language environment of the transcriber. Even under the influence of the normative romanization of the Kirishitan press which started in 1590, the original romanization in Kirishitan manuscripts still remained through its relation to the pronunciation of Japanese in those days.

The various copies of "Dictionarium siue thesauri linguae Iaponicae compendium" by D. Collado display many differences. When we use the documents of Kirishitan press for the study of the Japanese language, we also must consider the particular typographical background of the text.

研究分野：日本語学

キーワード：キリシタン 写本 表記法 ローマ字

1. 研究開始当初の背景

中世日本語の重要な研究資料であるキリシタン資料は、ローマ字で当時の日本語が記されているという特性によって大いに活用されている。その一方で、音韻研究の資料としては、ほぼ調べ尽くされたものとして受け止められている感がある。

だが、キリシタン資料を対象とした従来の日本語研究では、対象は主に版本であり、また、資料の成立過程に関与していたヨーロッパ人の母語の影響にあまり注意を払わないまま、これを日本語資料として利用していた。ヨーロッパ語の影響があるからといって、キリシタン資料の日本語資料としての価値が失われるわけではないが、キリシタン資料の日本語を全面的に信用することはできない、ということにもっと注意が払われてしかるべきであろう。と同時に、ヨーロッパ人の耳、すなわちヨーロッパ人の音韻体系を通して記されているということは、日本人自身が記したのではあらわれにくい日本語の問題を浮かび上がらせてくれているという利点もある。

以上の理由から、キリシタン資料の中でも日本語資料としての研究が進んでいない手稿類(写本や書簡、年報など)を研究対象とすることで、キリシタン資料の資料性を再検討することは有用であると言える。

研究代表者はこれまでの研究において、ローマ字書き日本語を大量に有する写本である「パレット写本」(1591年写)の表記を研究し、キリシタン資料に見られるローマ字書き日本語の表記には音声の介在があったことを指摘した(川口敦子、パレット写本の「四つがな」表記から、国語学、51(3)、2000、1-15)。「パレット写本」の表記からは、キリシタン資料のローマ字表記にはヨーロッパ人の母語の影響があらわれていることが指摘できるのだが、これは従来のキリシタン語学研究の主な対象であった版本、つまりキリシタン版だけの研究ではなかなか見えてこなかったことである。研究代表者はまた、平成17-19年度科学研究費補助金「中世日本語資料としてのキリシタン写本・書簡類の研究」(課題番号17720102)において、イエズス会ローマ文書館に所蔵されているローマ字書き日本語文の書簡の翻刻と分析を行った。この研究において、イエズス会ローマ文書館所蔵の書簡類に見られるローマ字書き日本語の表記は、パレット写本の綴り方とも違うものが多く、イエズス会の宣教師が考え出した「ローマ字書き日本語」の正書法一般の問題とも関連することを指摘した。

したがって、キリシタン資料の中でも特に音声の介在が現れやすい資料、すなわち版本ではなく手稿類を調査すれば、中世末期の日本語の音韻について、新しい研究成果を得られるはずである。

2. 研究の目的

キリシタンの手稿類は、歴史研究の観点から日本文字への翻字で紹介されることはあったが、原本のローマ字綴り全体を翻刻したものは少ない。本研究では、日本語研究の観点から、本文の画像や翻刻が公開されていないキリシタン手稿類を調査・収集し、そのローマ字書き日本語の綴り字を翻刻して、活用できる資料として学界に広く提供する。

また、キリシタンのローマ字書き日本語について、キリシタン手稿類の表記とキリシタン版の表記を総合的に分析し、キリシタン資料全体における日本語の表記法の揺れや変遷を辿ることによって、中世日本語の音声キリシタン人にとらえられ、表記に反映されていったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)日本国内および国外(イタリア、ヴァチカン、ポルトガル、スペイン、マカオ)の図書館・文書館に所蔵されているキリシタン手稿類の中から、ローマ字書き日本語を含む資料を調査し、資料収集を行う。

(2)収集した資料の翻刻および翻字を行い、公表する。

(3)翻刻した資料のローマ字表記の特徴を分析する。

(4)(1)~(3)を年度ごとに並行して行い、最終的には、キリシタンのローマ字書き日本語の表記について総合的な分析を行う。

4. 研究成果

(1)資料の調査・収集

ローマ字書き日本語の記載が期待されるキリシタン資料のうち、日本国内においては、上智大学キリシタン文庫と東京大学史料編纂所に所蔵されているマイクロフィルム資料を用いて、事前調査を行った。

日本国内で複写等の閲覧・入手が困難なものについて、下記の図書館・文書館で資料の調査と収集を行った。

・イタリア：イエズス会ローマ文書館、ヴァリチェリアナ図書館、ローマ大学アレクサンドリナ図書館

・ヴァチカン：ヴァチカン図書館、教皇庁立ウルバノ大学図書館

・スペイン：スペイン国立図書館、スペイン国立歴史文書館、王立歴史アカデミー、サン・ロレンソ・デ・エル・エスコリアル王立図書館、フランシスコ会イペロ・オリエンタル文書館、イエズス会カスティーリャ管区歴史文書館(旧トレド管区歴史文書館)、バリ

ヤドリッド・アウグスチノ会修道院
・ポルトガル：アジュダ図書館、リスボン科
学アカデミー、ポルト市公共図書館
・マカオ：マカオ歴史文書館

(2) 同一内容の本文を持つ複数の写本の表記比較

「1627年の殉教に関するフェレイラ報告書」の写本2種（ポルトガル国立図書館 Mss. 76-24、イエズス会ローマ文書館 Jap. Sin. 63, 123r - 196v）のローマ字書き日本語の表記について、詳細な比較研究を行った。イエズス会ローマ文書館本に見られる Nangasaqi（長崎）や Yendo（江戸）のようなガ行・ダ行音の前の n 表記は一般に日本語の鼻音を示す例として解釈されるが、イエズス会ローマ文書館本には明らかな書き誤りが多く、筆者はあまり日本語に精通していなかったと考えられる。したがって、この表記は筆者の実際の分析に基づいたものではなく、「こう書くべき」という知識に基づいたものである可能性が指摘できる。これはキリシタン資料の表記を解釈する上での重要な留意点である。

イエズス会ローマ文書館所蔵「1628年日本年報」の写本3通（Jap. Sin. 61, 166r-185r, 186r-218r, 219r-245v）のローマ字書き日本語の表記について、詳細な比較研究を行った。それぞれの写本の表記の傾向を分析し、アクセント記号などは日本語ではなく写本筆者の母語の表記規範の影響も考慮する必要があることを指摘した。写本には、規範性の高い版本では取り除かれてしまう「実際の日本語」の片鱗が現れやすい反面、筆写した人物の言語環境による影響も大きい。の問題と同様に、キリシタン写本の表記を日本語の問題として解釈する際には、それぞれの写本それぞれの成立環境を念頭に置かねばならないことを明らかにした。

(3) 手稿類の表記と版本の表記の関係

研究期間を通して収集した資料類（16世紀半ば～17世紀半ば）のローマ字書き日本語の表記について、資料の年代で傾向があることがわかった。

ツの表記は、日本でキリシタン版が刊行される1590年代以降は、版本と同じ表記に統一される。一方で、サ・ス・ソ・チ・ヅの表記は、1590年代以降も手稿類独特の表記は完全には淘汰されていない。手稿類における表記の揺れは、当時の日本語の発音の実態を示すものだと言える。

ツとヅのローマ字表記はともにポルトガル語にない表記であるが、1590年代以降、ツは版本と同じ表記に統一されるが、ヅは zzu のままで、ロドリゲスが提唱した dzu は採用

されなかった。当時の日本語の破擦音ツ・ヅの状態とその把握の問題として考えると、ツは破擦音の t の要素を示す版本の表記 t_{cu} のほうが都合が良かった。一方、破擦音から摩擦音に移行する段階にあったヅについては、言語に対する鋭い観察力を持っていたロドリゲスは破擦音の d の要素を把握できたが、一般にはヅに d の要素を観察することができず、dzu よりも zzu が表記として引き続き採用されたと考えられる。

(4) ドミニコ会版の調査

ドミニコ会版のうち、1622年マニラ版『ロザリオ記録』（スペイン国立図書館所蔵）、1630年マニラ版『日西辞書』（バリアドリッド・アウグスチノ会修道院所蔵本、フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵本）を現地で調査した。いずれも虫損や破損による傷みが激しく、閲覧に細心の注意を要する状態である。特にフランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵『日西辞書』は原本の閲覧不可の状態であった。

(5) コリヤード『羅西日辞書』諸本の調査

ドミニコ会関連の版本として、ドミニコ会士ディエゴ・コリヤード（1619年来日）による『羅西日辞書』（*Dictionarium siue thesauri linguae laponicae compendium*, 1632年ローマ刊）について、日本国内外に所蔵されている諸本31点の本文異同を調査した。諸本の異同箇所については大塚光信氏が既に指摘しているが（大塚光信『抄物きりしたん資料私注』、清文堂、1996、256-257）氏が調査した諸本とは異なる組合せの本文を持つ諸本が存在することがわかった。

臨川書店発行の影印本（土井忠生序文、大塚光信解題・索引『コリヤード羅西日辞典』、臨川書店、1966）の底本「マドリ一本」は、スペイン国立図書館に存在する3点のうちどれに該当するのか不詳であったが、現地調査と本文異同の確認によって「Salon General 3/45034」であることが判明した。

諸本の本文異同の状態から、『羅西日辞書』正篇と続篇は成立事情が異なると考えられる。正篇・続篇ともに少なくとも1回の改訂を経ているが、正篇は諸本の本文パターンが少なく、比較的早い時期に改訂版が確立したようである。一方の続篇は、本文の組合せパターンの種類が多く、改訂前と改訂前の印刷が混在する状態で製本を行ったと考えられる。したがって、すべて改訂後の本文を持つものが存在するかどうかは偶然に左右されると言える。

日本語資料としての『羅西日辞書』の利用には、印刷と製本の背景による本文異同の可

能性を常に念頭に置く必要があることが指摘できた。日本で出版されたキリシタン版を使った研究においても同様の注意が必要である。

(6) 関連資料の調査

イエズス会ローマ文書館

Jap. Sin. 文書の調査過程で、キリシタン手稿類である「バレット写本」(ヴァチカン図書館所蔵) 所収文書の内容と関係があると思われる「日本で出現した十字架」の絵 (Jap. Sin. 23, 379a) を発見した。

ポルト市公共図書館

キリシタン版『フロスクリ』とコリヤード『羅西日辞書』等の調査に付随して、幕末頃の日本関係資料を閲覧した。これらの資料は松田毅一氏の記録に簡単な言及があるが(松田毅一『在南欧日本関係文書探訪録』、養徳社、1964、196)、整理番号も資料に関する情報もはっきりしない状態で所蔵されていた。本研究の対象外の資料ではあるが、ポルト市公共図書館に所蔵されている日本関係資料であり、日欧交渉史関係の資料として価値あるものとして、調査報告を行った。

マカオ歴史文書館

マカオのキリシタン関係文書は 19 世紀の火災により大半が失われたが、16 世紀以来のポルトガル語による資料を含む行政文書群 (Leal Senado 文書) を調査した。マカオの行政文書という性格上、キリシタン関係文書に比べると日本語の出現頻度はかなり低くなるが、それでも Nangasaque (長崎)、Quichizaimon (吉左衛門) などの地名・人名をいくつか見いだすことができる。特に「長崎」の表記はほとんどが Nangasaque に固定されているようであった。この表記の固定化の傾向が、資料の種類によるものなのか、年代によるものなのか、検討の必要がある。

(7) 得られた成果の国内外における位置づけ

従来の研究では、同一本文を持つ写本間の表記を、写本内の日本語をすべて対照させて詳細に比較したものはなかった。本研究により、写本間には表記規範にかなりの違いがあり、それは写本の筆者の言語環境の影響がある可能性が高いことが明らかになった。これは、今後の研究において、キリシタン資料のローマ字表記について論じる際に必ず考慮しなければならない要素となる。

従来の研究では、キリシタン手稿類の表記を通時的に比較したものは少なかった。およそ 1 世紀にわたる複数のキリシタン手稿類の表記を比較し、手稿類全体を俯瞰した研究は、本研究が初めてであろう。本研究によって、キリシタン手稿類の表記には、1590 年代以降

に版本の表記の影響が及んだものと、及びにくかったものがあることが明らかになった。

日本語学の分野においては、ヨーロッパ式活版印刷の技術的な事情をあまり考慮せずに、キリシタン版の本文を取り扱ってきた感がある。本研究の一環であるコリヤード『羅西日辞書』諸本の本文異同の調査によって、当時の活版印刷本では印刷や製本の段階において、改訂前と改訂後の本文が様々に組み合わせられて成立するのが珍しくないということが確認できた。今後は、キリシタン版研究においても、このような事情を勘案して本文を検討しなければならなくなるであろう。

日本国外の図書館・文書館での調査の際、当該施設のカatalogに掲載漏れがあるキリシタン関係・日本関係資料を確認し、指摘した。これによって、これまで登録漏れのため存在が認識されていなかった関係資料が日の目を見ることになるであろう。また、当該施設のアーキビストや司書との意見交換により、その資料の性質と価値を互いに正しく認識することができた。

(8) 今後の展望

キリシタン手稿類の表記の通時的研究

本研究により、キリシタン手稿類の表記は、版本が登場する 1590 年を境に版本と同じに統一されるものとそうでないものがあることがわかった。本研究で収集できた資料は 1570~80 年代・1590 年代半ば~1600 年代の資料に乏しく、空白の年代がある。今後はその空白の年代を埋めるための資料収集が必要となる。

同一本文を持つ写本の比較

本研究の一環で、スペイン人商人アビラ・ヒロンによる『日本王国記』写本の本文影印を収集した。『日本王国記』のローマ字書き日本語の表記については概要的な研究は存在するが、部分的なものであり、単語レベルで対照させて分析すれば、これまで見えてこなかった表記規範が見えてくる可能性がある。イエズス会とは異なるスペイン語で、宣教師ではない商人の文書ということで、キリシタン手稿類の表記との比較対象として、改めて研究する価値がある。

マカオ関係文書との関係

キリシタンのアジア拠点であったマカオに残る古文書の中から、ポルトガル語文脈に現れる日本語を探索し、同じポルトガル語の表記規範でありながら、キリシタン資料の表記とは何が同じで何が異なるのか、年代によって日本語のローマ字表記はどのように変化していくのか、本研究ではそのごく一部に触れただけであった。日本からキリシタンが

追放された 17 世紀以降も、ヨーロッパやそのアジア拠点には日本の情報が伝えられていたが、マカオなどのアジアのポルトガル語圏において日本語がどのようにローマ字書きされていたのかという問題は、日本語のローマ字表記の歴史としてこれまで見落とされていた部分である。キリシタン資料の日本語表記をどのように位置づけるかという意味でも、この方面からの研究が必要であると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

川口 敦子、コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同(4) 活版印刷の技術的背景から、三重大学日本語学文学、査読無、26、2015、掲載確定

川口 敦子、キリシタン手稿類のツ表記とその周辺、国語国文、査読有、84(4)、2015、115-129

川口 敦子、コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同(3) 「マドリー本」をめぐって、三重大学日本語学文学、査読無、25、2014、1-10
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/13932>

川口 敦子、コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同(2) 国内諸本など、三重大学日本語学文学、査読無、24、2013、1-9
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/13091>

川口 敦子、ポルト市公共図書館所蔵日本関係資料について、三重大学人文学部文化学科研究紀要 人文論叢、査読無、30、2013、137-142
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/12257>

川口 敦子、一六二七年の殉教報告書の写本二種に見えるローマ字表記、叙説、査読無、40、2013、104-117
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3370>

川口 敦子、コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同 ローマ、ヴァチカンにおける調査を中心に、三重大学人文学部文化学科研究紀要 人文論叢、査読無、29、2012、67-74
<http://miuse.mie-u.ac.jp/handle/10076/12213>

[学会発表](計2件)

川口 敦子、キリシタン手稿類における破擦音の表記、第1回キリシタン語学研究会、2014年9月9日、京都府立大学(京都府京都市)

川口 敦子、キリシタン手稿類のローマ字表記から見えること、平成26年度三重大学日本語学文学会、2014年6月28日、三重大学人文学部(三重県津市)

[図書](計2件)

豊島 正之 編(共著書)、八木書店、キリシタンと出版、2013、267-285

若木 太一 編(共著書)、勉誠出版、長崎 東西文化交渉史の舞台 ポルトガル時代/オランダ時代、2013、106-127

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

研究活動報告用のブログ

<http://akawaguchi.exblog.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川口 敦子 (KAWAGUCHI, Atsuko)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：40380810

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし